

クロスマッチ用検体の外観より溶血副作用を疑った症例

◎河野 紋¹⁾、高田 旬生¹⁾、南 睦¹⁾、下村 大樹¹⁾、嶋田 昌司¹⁾、松尾 収二¹⁾
公益財団法人 天理よろづ相談所病院¹⁾

血漿の色調は、溶血副作用を疑う上で大きな手がかりとなる。今回、クロスマッチ用検体の血漿色調から溶血副作用を疑い原因を追及したところ、服用薬剤が関与していた症例を経験したので報告する。

[症例] 症例は、重症再生不良性貧血(AA)の80歳代と、40歳代男性2例である。クロスマッチ用検体の血漿が暗褐色であったため、溶血副作用を疑い検査データを確認した。T-Bil、LD およびハプトグロビンに異常を認めず、尿潜血も陰性であったが、黄色度のみ高値であった。黄色度(450nm 測定)は、T-Bil 値の約10倍に相関する様設定している。しかし、2症例の黄色度はそれぞれ38、24であったのに対し、T-Bil 値は1.3、1.1mg/dL と相関を認めなかった。そこで、T-Bil 測定への影響、色調変化の時期および薬剤投与について調査した。

[結果および考察]

1. T-Bil 測定への影響：当院のT-Bilは、バナジン酸法で測定しているため、測定原理の異なるジアゾ法で再測定したところ、1.4、1.2mg/dLと変化を認めなかった。これより、

T-Bil 測定が阻害を受けて低値を示しているのではなく、血漿の色調により黄色度のみが高値を示したと考えられた。

2. 色調変化の時期と投与薬剤：輸血前保存検体にて、色調変化の時期を確認したところ、2症例ともエルトロンボパグ(商品名：レボレード®)の服用開始時期と一致した。エルトロンボパグは、昨年よりAAにも認可された薬剤で、外観は白色の錠剤であるが、水溶液は暗褐色を呈する。

3. 症例とエルトロンボパグの吸収スペクトル：エルトロンボパグによる血漿色調への関与を確認するため、本2症例、エルトロンボパグ水溶液(以下:水溶液)および健常人血清の極大吸収波長を測定した。2症例の極大吸収波長は、共に450nmであり、水溶液は445nmと両者は近似し、健常人は410nmであった。これより、2症例の血漿色調は、エルトロンボパグにより引き起こされたことを確認した。

[結語] エルトロンボパグを服用すると、血漿の色調は溶血副作用を疑わせる暗褐色を呈することを認知する必要がある。

0743-63-5611(内線:3134)